

言葉と物

—英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開—

森 正 人

- | | |
|----------------------------------|-------------------------------|
| I はじめに | (2) パフォーマティヴィティとハイブリ
ディティ |
| II 新しい方向と文化論的転回 | (3) 非表象理論から複雑系へ |
| (1) 文化と地理的表象の諸問題 | IV 物質論的再転回? |
| (2) ピートとミッチェルの批判から見え
る形而上学の問題 | (1) もう一人のクラング |
| (3) 批判の向こうへ | (2) アクター・ネットワーク理論の射程 |
| III 文化の/地理(学)のマテリアリティ | (3) マテリアリスト・リターンズ |
| (1) 物質への転回 | V おわりに——人間を超えた世界への入
り口に立って |

キーワード：文化論的転回，西洋形而上学，存在論的転回，マテリアリティ，ポスト・ヒューマニズム，倫理

なんと、橋が寝返りを打つ！ とたんに落下した。私は一瞬のうちにバラバラになり、いつもは溪流の中からのどかに角を突き出している岩の尖りに刺しつらぬかれた。¹⁾

偶然の唯物論……の議論を極端にまで推し進めると、物質性は単なる痕跡であり、痕跡を残す身振りの物質性であって、この痕跡は洞窟の壁や一枚の紙に残された痕跡と区別しがたいのです。²⁾……物質性の優位は普遍的のです。

I はじめに

1993年、若き四人の大学院生たちがイギリスで生じつつあった人文地理学の新しい潮流を影響的な教科書を例に取り紹介した。³⁾その10年後の2003年にイギリスのオープン・ユニヴァーシティの地理学科が出した新しい教科書を繙けば、そこに十年前のもの、あるいは日本で現在でも「新しい」

潮流と了解されている事項を見つけることは難い。⁴⁾言説や表象は全九章のうち最初の章でのみ語られており、出来事/事件(event)、マテリアリティ(materiality)、物体性(corporeality)、情動(affect)、実践といったキーワードを付帯しながら、代わって説かれるのは空間の存在論であり物質性である。

本稿が目指すのは、1980年代から2000年代半ばまでのイギリスの人文地理学、なかでも社会・文化地理学の動向を跡付けることである。⁵⁾すなわち文化地理学のこの「新しい方向」の登場に対して、伝統的な文化地理学からのナイーブな批判を除いて、どのような批判が行われたのか、そうした批判をとおしてどのような議論が1990年代末からなされるようになったのか概観したい。こうした作業を経てようやく、近年のイギリスの人文地理学において目指される西洋形而上学の乗り越えと「人間を超えた世界」、ポスト・ヒューマニズムの

問題構制にたどり着くことができる。本稿はそのための見取り図を示し、それにより理論的な議論を行うために用意されている。

このテキストはそれゆえ来るべきものたちのために二重の意味で開かれている。一つはここで示された前提からスタートしてやってくるかもしれない新しい議論に対して。もう一つはそうした議論において関係的な「物」として現れてくるかもしれないもの（マテリアリティ）に対して。

これまで、日本の地理学では、1990年代におけるイギリスの新しい潮流はいくつかのテキストをもとにして、あるいはカルチュラル・スタディーズの紹介をとおして示されてきた⁶⁾。しかし重要な書物はほとんど翻訳されず、十分な理解が得られたとは言い難い状況にある⁷⁾。またこの地理学の新しい方向性に対しては、いくつもの批判も行なわれてきた。そこでのモダニスト的視点あるいは地理的表象に対する批判の展開が加藤政洋によって提示され、それとの関係をほのめかしながら泉谷洋平は、英語圏の地理学においていく人かの間でなされた論争から、アンドリュー・セイヤー（Andrew Sayer）の批判実在論の「場所」を提示している⁸⁾。本稿は、加藤と泉谷が提示した論争をより広い範囲で、より長い時間スケールでとらえることになる。そうすることで、モダニズム的地理表象や言説への偏重への批判をとおして、近年のイギリスの人文地理学で盛んに議論されている存在論、マテリアリティ、アクター・ネットワーク理論などがなぜ問題とされるのか提示できるだろう⁹⁾。しかしそれらすべてを詳述することは紙幅が許さない。そこで本稿は、こうしたトピックの議論の枠組みを示しつつ、とくに物質性、マテリアリティをめぐる問題を中心に議論を進める。よって個別の事例研究は紹介しない。それにより地理的知をめぐる新しい問題が提示される。英語圏における文化論的転回から現在までの議論の軌跡をたどる論考は、英文雑誌論文を含めても存在しない。したがって本稿の試みは単なる英語圏の議論

の翻訳ではない。

なお、この文化地理学の新しい方向の視角は日本においても展開されてきたが、それについては別稿で論じている。また、1990年代後半からの新しい文化地理学に対する批判の基盤となった理論と議論については、別稿を用意するつもりでいる。

II 新しい方向と文化論的転回

(1)文化と地理的表象の諸問題 1980年代半ば以降のイギリスの地理学においては、ジェイムズ・ダンカン（James Duncan）をはじめとするアメリカの文化地理学での「文化」概念の再考の影響を受けながら、いくつかの試験的な会議が開かれていた。その一つが、イギリス地理学会（IBG）の研究グループ「社会地理学研究会（Social Geography Study Group）」（後の「社会・文化地理学研究会（Social and Cultural Geography Study Group）」）であり、1987年に *Area* 誌に掲載されたデニス・コスグローヴ（Denis Cosgrove）とピーター・ジャクソン（Peter Jackson）の「文化地理学における新しい方向」は、1987年にロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ（University College of London）で開かれたこの研究会の会議に向けて前もって書かれたレビューである。また、1991年9月にこの研究会がスコットランドのエジンバラ大学で開催した会議の予稿集、*New Words, New Worlds*もまた、当時のイギリスにおける社会・文化地理学の経過を物語っている。

現在では入手困難なこの研究会のニュースレターのいくつかは、やはり今となっては入手困難なその予稿集に再録されている。それをたどると、この研究会で中心的な役割を果たし、エジンバラでの会議でも発表したコスグローヴは、1988年のニュースレターで、景観を形作る世界の文化的多様性に注目するために、地理的哲学と方法論において大きな変化が求められることを説いている。ここで彼は、人間の想像力、観念、欲望、信条、価値を「文化」という語に込め、社会地理学とい

う単語の頭に付け加える。つまりこの研究会は信条、価値、観念的現れの「接着剤」としての「文化」という語を社会地理学の中に持ち込むことで、与件としての「社会的なるもの」と「文化的なるもの」を再考し、人間が経験する地理に対する地理学の説明の可能性を押し広げた。¹³⁾ 予稿集の編者クリス・ファイロ (Chris Philo) によってそれは、人間の観念を枠づけるイデオロギーと他者や地理との関わりを吟味する「道徳の地理学 (moral geography)」¹⁴⁾ として提唱された。そこでとくに注目されるのが、他所の他者に対する言説や表象であった。これがイギリスの地理学における「文化的なるものへの転回 (cultural turn)」である。

この文化論的転回は、コスグローヴとジャクソンによって、「新しい方向」として広く紹介された。彼らはアメリカのバークレー学派との対比をとおして、自らを「新しい方向」を提示するものと称する。すなわち、(1)農村社会を主な対象としていること、(2)単一の文化集団によって形作られた物質文化の可視的な要素である景観にもつぱら注目してきたこと、(3)静的な景観とそれによって策定される地域なるものを地図に描かれるべきものとして捉えてきたこと。こうしたバークレー学派の研究の問題点を批判しつつ、先に述べた新しい文化の概念と地理的表象の危機が明示される。¹⁵⁾

新しい文化の概念は、「意味を与え価値を与える意味的象徴へ変形させる媒介物」と文化をとらえ、「支配的なイデオロギーとそれに対する抵抗」¹⁶⁾ とその政治的含意にも着目するカルチュラル・スタディーズ、とくに文化を記号のシステムとしてみるレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) からの影響が指摘できる。¹⁷⁾ ここで問題となるのが地理的表象の危機であるが、それは地理学が自明の研究の対象としてきたものと、景観の解釈の手法にひとまず二分できる。前者については、「歴史的なものだけでなく現代的なもの、空間的なものだけでなく社会的なもの、農村的なものだけでなく都市的なもの」が研究対象として再設定

され、それまでの文化地理学が有していた、文化は物質的な景観として現れ、地理学者はそれをとおして地域や文化領域を描くことができるという暗黙の前提が否定される。後にジャクソンは、当時問題にしていた表象の危機は、人類学におけるジョージ・マーカス (George Marcus) やジェームズ・クリフォード (James Clifford) たちと共有していたと回顧する。¹⁸⁾ 歴史的、農村的なものへのバークレー学派的偏愛は、文化的本質を設定する他者の文化表象の問題を介して批判された。後者については、クリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) の視角を参照した、社会的ドキュメントとして読まれ、解釈されるべきテキストとしての景観のメタファーの展開と、それを発展させた景観表象の分析におけるイメージの重要性を強調する景観のイコノグラフィーとしての展開を挙げることができる。

1997年にシンガポールのリリー・コン (Lily Kong) が先述の「文化地理学における新しい方向」論文を再検討し、それに対してジャクソンが回答を寄せた。¹⁹⁾ 彼女が指摘したのは、「新しい方向」がそれ以前のいくつもの伏流に触れていないために、いくつものそれに先立つ研究の影響が覆い隠されてしまい、そうすることでかえって新しい/古いという二項対立が安易に強化されてしまっていることだった。彼女が新しい方向につながるものとして挙げるのは(1)ジェームズ・ブラウト (James Blaut) が文化地理学は文化を全体的なるものとして扱っていると批判し、階級に注意することで文化の政治的含意にも取り組むよう呼びかけていたこと、²⁰⁾ (2)ダンカンによるバークレー学派の文化超有機体説への批判、²¹⁾ (3)1970年代初頭のポール・ウェトレイ (Paul Wheatley) による景観の象徴的意味の研究や、テキストとして都市の景観を読み解くデヴィッド・レイ (David Ley) の研究等、(4)「政治的」景観と「土地特有」の景観との緊張関係を説く J. B. ジャクソン (J. B. Jackson)、日常生活におけるマス・メディアと大衆文化を解

きほぐすジャクリーン・バージェス (Jacquelin Burgess) とジョン・ゴールド (John Gold) 等, 大衆文化の政治学とも言うべきものへの視点である。ジャクソンはこれに対する応答の中でさらに1980年の *Area* 誌, 1983年の *Antipode* 誌の議論, 1987年の社会地理学研究会の会議と同年にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で行われた学会を先行的な契機として挙げている。

デレク・グレゴリー (Derek Gregory) とレイは, この1987年の二つの会議の要点を手短かに三つにまとめた²²⁾。すなわち, 第一に文化を経済と政治との絡み合いとして考えること, 第二に民族誌とイコノグラフィーの方法論的再考, 第三に他者表象の生産である。これらの問題に取り組むために, 地理学はナイーブな景観の形態学的理解を離れ, 緊張関係をはらむものとしてそれをとらえ直す必要があるし, グローバル化し他者の「文化」が偏在し常に権力が編み上げられる中で地理がますます重要になっていることを認識せねばならないのだった。どちらかという地理学の学問的枠組みが持つ表象の問題を取り上げるコスグローヴとジャクソンに対して, グレゴリーとレイは, そうした表象を作り出すモダニティを問題化している。いわばモダニティ批判の道具として文化の地理学が求められるのであり, このときグレゴリーとレイはそうした研究に対して「新しい文化地理学 (new cultural geography)」という語を用いた。

ロンドンとヴァンクーヴァーでコインの表裏のように文化の地理が批判的に検討される。もちろんそこで表明される文化概念の問題と地理的表象の危機は二分すべきではない。それらはモダニティにおいて互いに補強しあっているがゆえにやっかいな問題であった。場所, 景観といった地理学の対象は地理的表象の産物以外のなにもものでもなく, その検討は大西洋の両側の研究者から寄稿されて編み上げられた *Place/culture/representation*²³⁾ に一つの形として現れた。導入部でダンカンとレイは近代科学における表象の四つの様式を示しな

がら, フェミニズムの批判を参照して伝統的な地理学における地理的表象のミメーシス (模倣) の理解を批判し, 間テクスト的な地理の解釈学を強調する。こうして, モダニティにおいて生産されるあたかも静的で自明の地理的表象を, テキストの内と外, 生産者と消費者の関わりから検討する²⁴⁾ 地理的理想力が必要とされた²⁵⁾。

(2) ピートとミッチェルの批判から見える形而上学の問題 新しい文化地理学に対して, それが理論的に過ぎるという批判がなされた²⁶⁾。こうしたしばしば簡単に繰り返される批判のほか, 都市をテキストとして扱うダンカンに対して, リチャード・ピート (Richard Peet) がマルクス主義的な視点から行なった批判が挙げられる。彼はダンカンのテキストの捉え方をポスト構造主義的だとし, 文化を社会秩序の記号として見るレイモンド・ウィリアムズの文化唯物論が, 「明瞭さの枠組み」を強調するポスト構造主義的強調によって軽視されているとする。こうした軽視はつまるところ, 語彙や言語に多分に依って景観を解説するために, 意味体系の形式に表されない, 人々が自身の世界を再創造する物質的なプロセスを抽象化してしまうと彼は主張する。また, 社会の組織化や景観の再創造における階級/ジェンダー/人種体系への視点が欠如していると彼には映るのである。

ピートが想定するのは, 階級, 階級意識を持つ労働者, それによる闘争である。社会の審級としての下部構造, 下部構造としての物質的労働と, 上部構造としての言語を自明視するピートにとって, 「半自動的」でしかない言説がどのように歴史や地理の矛盾や相互作用をとおして作られるかが問題にされねばならない。ピートが信じるころによれば, それがどのように弁証法において思想として作り上げられるのかが問題なのであり, 言葉をもとに景観をテキストとして読むことは, 何も社会的全体を解明していないことになると批判している。もちろん, 後述する西洋形而上学批判においては, ピートの現実と仮想のこうした単

純な区分や批判は退けられるべきだと思われる。

次に取り上げるのは、1995年と1996年にアメリカのドン・ミッチェル (Don Mitchell) と、コスグローヴ、ジャクソン、ダンカンの三者の間でなされた、文化の物象化の問題を巡る論争である。²⁹⁾ ミッチェルは、文化超有機体説を批判する新しい文化地理学が、文化を存在論的な所与として見なすことで、なお「文化」を物象化していることを批判する。文化などというものは実在せず、あらゆるものの説明として引きあいに出されて用いられる「文化の観念」が存在すると指摘するのである。さらに物象化された文化観念というイデオロギーが、資本主義社会においてどのようにペテンとして作用しているのかを説明する。

ミッチェルはとりわけ、かつて文化超有機体説批判を行ったダンカンもまた言語によってのみ文化を分析しているため、物象化した文化観念を用いる過ちを犯していると批判する。こうした批判はピートのそれと似ているように思われる。ピートにとってもミッチェルにとっても、文化は上部構造であり、それを介して虚偽意識が形成される。彼らにとっての審級は下部構造たる資本主義である。しかし、ピートがこの下部構造の審級をいくぶん単純に考えているのに対して、ミッチェルは上部構造と下部構造の二元論に陥ることを、「文化」の生産を媒介する「クリティカル・インフラストラクチャー」の役割を強調することで回避しようとしているように思われる。³⁰⁾

このミッチェルの批判を受けた3人はそれぞれ翌年に回答している。ジャクソンは、自らが基本的にミッチェルと共通の見解を持っていることを示している。例えば、ジャクソンは、文化を説明の装置として用いることに反対し、文化は説明されるものだという共通の見解を共有しているとす。そして、テキストに依存するのではなく、文化が埋め込まれる物質世界に関心を払うことが重要であると、その当時の彼自身の研究との共通性を示した。ただし、ミッチェルが文化観念の課題

を制限していることが、文化の物質性と制度性の持つ重要性を減退させてしまうことに懸念も表明している。

一方、コスグローヴはミッチェルが言うような文化の物象化をしていないこと、ミッチェルの議論が前半はメタファーとしての文化の批判であるのに対して、後半は現実主義的な批判に転換しており批判に首尾一貫性が認められないことなどを指摘し、ミッチェルとの間に合意を作り出そうとしない。これは、文化の概念と自然の概念、あるいはそれらと何か別のものとの弁証法を想定するコスグローヴ、文化観念の存在を否定するミッチェル、この両者の思想的な不一致に起因するものと考えられる。かつて文化超有機体説批判を行ったダンカンは、文化に存在論的な立場を与えることで文化主義に陥る危険性を指摘することには賛同する。しかし同時に、新しい文化地理学が文化に存在論的地位を与えていることを認めつつ、ミッチェル自身も同じ陥穽に陥っていること、彼が物質的制度的実践から思想を分けようとしているために、このことを認識できていないことを批判している。

これらの論争で筆者が関心を持つのは、弁証法の問題と文化の物質性に関する点である。コスグローヴは自然と文化の弁証法を前提するのに対し、ミッチェルはそれを何とか回避しようとしている。また、ダンカンが文化主義の危険性としてほめめかし、ミッチェルやジャクソンが明示したのは、文化の政治経済学的問題であり、文化の物質性であった。景観だけでなく、商品などの物質が文化的なるものとして現れる物質世界へ関心を向けること、物質が文化的なるものとして埋め込まれるプロセスに注目することは、生産だけでなく消費にまで視角を拡げることを要求し、なにかづく生産する文化の政治学に資本主義の力を差し込む方向へと繋がると彼らは考えつつあった。³¹⁾

(3) 批判の向こうへ 2001年の *Antipode* 誌は文化論的転回後の経済地理学や批判地理学への影

響を警戒する特集を組んだ。理論を好む文化論的転回により、地図が描けない、表が整理できない地理学者が増えたという多分にヒステリックな糾弾も見られた。³²⁾これは1990年代の半ばに文化論的転回の影響を受けながら、抽象的な理論やモデルに過度に依存せず、柔軟性を持ちローカルなスケールでの社会的文脈に注目する新しい経済地理学 (new economic geography) が登場したことへの警戒感と関連していると言えよう。³³⁾文化論的転回へのするどい批判を行なったのはクライヴ・バーネット (Clive Barnett) くらいであろう。彼は、文化論的転回以降、それに関する雑誌、著書の多くは Routledge 社によって出版されており、同社はそれにより大きな経済的収益を上げていることを挙げながら、文化論的転回が持つ出版資本主義との親和性を指摘している。³⁴⁾

一見すると上記の批判と同様に、アンドリュー・セイヤーは、言説の分析のみを行い実在を考慮しない文化論的転回が経済学の理解にはほど遠いと批判を行なった。³⁵⁾しかし彼のこの批判は、経済還元主義としてはもちろん、文化と経済の両方が重要なのだという単純な見解として読まれてはならない。彼は、文化の政治学という言葉で展開されるカルチュラル・スタディーズの言説が、結果的に経済や政治的事象をなんでも文化理論で説明してしまっていることを痛烈に批判している。その理由は、文化的なるものと経済的なるものは、それぞれ対照的な指向性や目的に対して働くからだと彼は指摘する。すなわち、人間の価値観を規定する文化的要因は内的志向 (特定の実践や美德をとおしてのみ獲得される「内的な価値」の志向)、社会的再生産を目的とする経済的实践は外的指向性 (権力や富や地位といった名声を獲得するための実践とは関わりを持たない「外的な価値」の志向) を持つとして、従来のマルクス主義が前提する使用価値と交換価値の区分を、この両者で置き換える。それによりセイヤーは商品の価値がつねに購入者の倫理実践によって脱商品化あるいは再商品化され、

多様な形式を取ることを論じるのである。研究者に求められるのは、この両者の指向性の違いを十分に認識することなのだが、それぞれはしばしば互いの方向に屈曲してしまうので、そうした両者の屈曲を見極めることも必要となる。セイヤーは論考のタイトルに文化と経済の「弁証法」なる語を用いているが、それは経済 (下部構造) が文化 (上部構造) を最終的に規定するような関係性ではもちろんない。彼が強調するのは実践され演じられる経済活動であり、そのときに文化を含む倫理的要因が重要な意味を持つのである。そこでは経済がつねに演じられる。³⁷⁾

これをより深く理解するための導きの糸となるのが、ミッチェルの批判論文の2年後に出されたフィル・クラング (Phil Crang) の論考である。³⁸⁾この論文の第一の水準では、文化論的転回を介して経済地理学は文化と経済の複雑なもつれ合いに積極的に取り組むべきだという主張がされている。この水準ではミッチェルもクラングも、言説にのみ注目する文化論的転回の傾向を批判し、文化の政治経済学を推し進める必要性を説く。

しかし第二の水準において、クラングは経済的なるものが文化的倫理によって演じられることによって立ち上がってくることを強調することで、経済と文化の二分法を批判する。このとき彼は同じ本に収められた、先に説明したセイヤーの論文に言及することによって、常に合理的選択をする人間存在という近代経済学の暗黙の前提と、文化 / 経済、観念 / 現実といった安易な二分法を避けることが明示される。クラングにとって問題なのは倫理の分配・配置であり、経済 / 分配・配置は、さまざまな感情を持つ行為主体 (アクター) と不可視の集合としての主体的行為 (エージェンシー) によって徹頭徹尾演じられるのである。⁴⁰⁾

このことは、クラングによるミッチェルの著書の書評においても明らかである。彼は本書を、空間と場所をとおしての文化の生産と消費を強調し、文化の政治経済学という新しい文化地理学以後の

書として評価しながらも、文化の正しさや価値に関する観念が十分に展開されていないこと、資本主義における文化の生産の組織化の問題が検討されていないこと、マルクス主義的な政治経済学が有する排他的な文化の生産、流通、消費の概念との違いが戦略的に明示されていないことを批判する⁴¹⁾。クラングの議論の展開から考えるなら、そうした消費者（層）の感情・倫理は生産者（層）と重層的に決定し合うのであり、「経済的なるもの」はその都度決定される可変的なパフォーマンスの中で浮かび上がる。

III 文化の／地理（学）のマテリアリティ

（1）物質への転回 ミッチェルとの文化観念の論争において、ジャクソンは言語や表象だけで政治学を語る「徹底的につまらない文化地理学を生産する危険性」を回避するために、物質世界への視点の重要性を指摘する。文化地理学が表象や言説のみで政治学を語ることの問題性が十分に論じられたこの時点で、ジャクソンの物質への回帰は十分な賛成を得たようである⁴²⁾。

ジャクソンは、それまでの文化の商品化に関する議論はとかく商品の真正性に関する議論に陥っていたとし、権力の社会的諸関係が差異の政治経済学と関わりながら、われわれを結びつける世界をどのように形成しているのか明らかにする研究が必要だとする⁴³⁾。それにより「経済的なるもの」と「文化的なるもの」の二分法をのりこえることができるのであり、現代の消費文化が作りあげる物質的形態にも注目する必要がある。言語やイデオロギーではなく、商品という物質が地理学の問題として浮上する。

2000年、雑誌 *Ecumene* が *Cultural Geographies* へと改名した。その第1号にジャクソンは「社会・文化地理学を再物質化する」という論考を置いた⁴⁴⁾。彼は、文化的なるものと経済的なるものの関わりを説くセイヤー、ミッチェル等を参照しながら、商品の物質的性格に注目することで、

二分されがちな生産と消費を接合し、それによりグローバリゼーションが文化的な文脈に埋め込まれる様子を捉えることができるとする。ジャクソンにとって物質性の議論は、グローバリゼーションが均質な空間を生産するという議論に抗うためのものだった。また彼は、人びとが事物を使用するときに対象化された社会的諸関係によって物質は意味を獲得するのであり、そうした物質は人びとの経験をわれわれにほのめかすと言う。それは生産様式から単純に象徴的意味を解釈しているという文化論的転回への批判に応えるためのものでもあり、文化唯物論は政治経済学の中で実践されるものだと主張する。もちろん彼は、物質文化を社会的諸関係に簡単に還元することの危険性にも自覚的で、フェティシズムを回避しながら両者の弁証法的関係を明らかにする必要があるとする。

ジャクソンはこの論文の2年前に、後述するダニエル・ミラー（Daniel Miller）やナイジェル・スリフト（Nigel Thrift）などと、消費活動が場所やアイデンティティをどのように作りあげるか探求している⁴⁵⁾。彼らはショッピングが、(1)関係性（生産、流通、市場化など）の土台となるネットワークにあること、(2)そうした関係性が日常生活の中に埋め込まれていること、(3)そうした日常性においてときに消費者をして再帰的にならしめること、(4)それゆえ社会的諸関係そのものであること、(5)ショッピングという行為は商品そのものであり両者が社会的諸関係を具体化しなおかつそれらを新しい方向へと押し広げること、こうした点から重要だと考える。そしてアイデンティティは単に後期モダニティの再帰的なプロジェクトであるばかりでなく、社会的諸関係そのものであるショッピングという実践や商品という物質、さらに場所との関係によって多様に構成されるのである。

1993年のエジンバラ大学での会議の要旨集である *New Words, New Worlds* では、物質の問題の発表は一つだけであり要旨集の最後に置かれていた。つまり、ほとんどの発表は地理的言説や表

象に取り組むものであった。こうした言語への過剰な依存は、現実世界の物質的基盤を無視することになりかねず、2000年にファイロは論文 'More words, more worlds' において非物質と同時に物質も重要であると指摘したし、ロレッタ・リース (Loretta Lees) もまた都市研究の再物質化を求めた⁴⁶⁾。このように2000年代初頭に人文地理学において物質への再注目が要求されるようになり、そうした態度は現在、物質論的転回 (material turn) と称される。

物質論的転回を訴えかける論文でジャクソンが参照するのが、文化人類学者ダニエル・ミラーである。ジャクソンは彼のヘーゲル的な対象化の概念、すなわち、人間と事物間、サービスや商品と制度間の関係の止揚に大きく依拠する。ミラーは、インドのある農村における陶器の生産と流通過程を観察したが、この調査以降、彼は人間による客体化の結果として物質を捉え、それらの弁証法的な関係によって市場が形成されるとした⁴⁷⁾。

地理学における物質の重要性は、まずはこのようにして浮上した。同時期の1990年代後半にはこの物質論的転回と平行していくつもの言説・表象中心主義への違和感が議論されていた。次にこれら、すなわちジェンダー研究を中心に展開してきたパフォーマンス性 (行為遂行性: performativity)、ハイブリディティ (異種混濁性: hybridity)、倫理、非表象理論 (non-representational theory)、複雑系理論 (complexity theory)、を概観する。それによってジャクソンらの物質への転回がもつ問題が浮かび上がるだろう。

(2) パフォーマンス性 (行為遂行性) とハイブリディティ
2000年に *Environment and Planning D: Society and Space* 誌は18巻4号と5号の二回にわたってパフォーマンスの特集を組んでいる。パフォーマンスへの関心は、少なくとも、1960年代に盛んになる社会科学や人類学における儀礼に関する研究までさかのぼることが可能である⁴⁸⁾。

この一連の動きの中で重要なのが、身体をめぐる

る知-権力の絶えざる書き込みというアイデアをパフォーマンス性 (行為の遂行性) としてとらえたジュディス・バトラー (Judith Butler)⁴⁹⁾ である。彼女は、イギリスの哲学者ジョン・オースティン (John Austin) に由来する行為遂行性と、フランスの哲学者ミシェル・フーコー (Michel Foucault) による言説の身体への書き込みとしてのセクシュアリティのアイデアをもとにして論を展開する。それにより、権力は反復される言説の中にその法制機能と産出機能をもつものであり、何らかの規制を受ける前のセクシュアリティは、そこから発生すると考えられている規範的なセクシュアリティの配置によって、言説の中で起源として遡及的に産出される「結果」にすぎないと理解されるのである。つまり、バトラーにとって「事実性」と考えられているものは、反復する行為 (パフォーマンス) によって、行為遂行的 (パフォーマンス性) に生産されるのであり、それによって身体の物質性が現れる。しかも言語によって体制を生産するというパフォーマンス的な反復行為の中に、現体制の強化と同時に、それへの非意図的な抵抗も胚胎されている。このアイデアは二つの方向、すなわち実践をとおしての身体の社会的差異の再自然化への関心と、人間の身体化された法則の一般的な観念の理解へと、その後の地理学におけるフェミニズム研究を導いた⁵¹⁾。

しかしバトラーの行為遂行性の議論は、身体に対する言説の力を理想化していると批判される⁵²⁾。つまりそれは、言語がそれ自体で閉じられた体系を持ち、その力能でもって他者を動かし、その意味や記号を変容させるという意味で、言表行為と社会的義務を同一視しているのである。そこでは身体はあくまで受動的な客体にとどまっており、それが能動的に言説の主体に働きかけるという動的なプロセスをとらえられない。表象は世界を言語と事物に分節/分断化する作用の名であるが、もし事物と言語が所与として分断されるのであれば、物質から遊離した表象の足場は極めて危うい

ことになる。そうではなく事物(客体)と言語(主体)の複雑なプロセスが問題にされねばならない。また、オースティンの言語が持つ行為遂行的機能の議論では、「約束」の遂行を視野に入れていたが、バトラーの議論ではそれが抜け落ちているように思われる。

こうした行為遂行性に代わって提出されるのがイントラ・アクティヴィティ(内的行為性)というアイデアである。主体と客体はそもそも存在論的に決定不可能である。両者をお互いにおいてその都度に、物質的かつ言説的に分節化する過程をとらえるのがイントラ・アクティヴィティの目論見である。そこでは言説的实践はプロセスを制限するが決定することなく、世界の物質性を再構成する役割を担う。相互作用する世界における内的行為性⁵³⁾とおして物質(身体)が現前するのである。

しかし、言説的かつ物質的に存在するとはいったいどのようなことなのだろう。ここでの「物質」は二重に理解されるべきである。言語によってのみ世界が構築されるならば、物質もまた言語によって現前させられる。しかし物質は言語による分節化に還元されえない。言い換えると、形あるもの(女性の身体)として存在してしまう物体が言語の分節化を可能にするし、それを客体化する主体の理性に働きかけることもある。また形あるものが存在するがゆえに、そこで繰り広げられているにもかかわらず自明視され忘却されている分断の原暴力(主体/客体、男性/女性の二分法)を過剰に示してしまうこともある。物質として形を持っているために、それが主体とは異なる(劣った)物質として区分される作業をはからずも示してしまうのである。身体は言語主義的な社会的実体の受動的な受け皿としてではなく、われわれの世界に対する感覚を登記したり方向付けたりする物質的装置や関係の生きられた繋がりとして見なされる。

地理学を含むジェンダーをめぐる研究において

は女性の身体空間への性的欲望の書き込みが問題とされてきた。そしてバトラーの議論の批判においては、自然的なるものとして欲望される女性の身体は形を持つがゆえにその男性的欲望を指し示し、しかもつねに流動的で永続的に再生する女性の物質的身体、物体性(corporeality)が注目されたのである。⁵⁵⁾ ジリアン・ローズ(Gillian Rose)はそれを「女性の形態学」と呼ぶ。⁵⁶⁾ ローズにとって有形の女性の身体空間は相互作用を通じて演じられ構成される、その都度変更される関係性からなるものである。先述のイントラ・アクティヴィティというアイデアはこうしたジェンダーをめぐる議論の文脈にある。それは主体/客体、男性/女性、精神/物質の決定不可能性を暴き出すのである。

この二項対立の迷路を抜け出すために、人間にも機械にも包摂されえない「サイボーグ」という形象を押し出すことで、男性/女性、人間/機械、人間/自然の二分法を攪乱し、部分から全体を形成する諸関係を解きほぐそうとしたのがアメリカの科学史研究者ダナ・ハラウェイ(Dona Haraway)である。⁵⁷⁾ ここでもその場限りでその都度なされる決定のプロセスが問題となる。しかし、イギリスの地理学者サラ・ワットモア(Sarah Whatmore)は、このハラウェイの言うハイブリッドな主体にも、「自己を知ること」の構成において認知能力と言説能力に特権が与えられてしまっており、差異の取り引きとおして構成される諸事物の結びつきにおいて人間の倫理的プラクシスが果たす役割を重視していないと批判した。⁵⁸⁾ 言語や言表行為が自動的に社会的義務を付帯すると見なしていると批判されたバトラーと同様の批判が、ここでは見られる。また、セイヤーが重視する倫理がここでも問題となっている。

ワットモアが重視する倫理(ethics)は人間の行為を規範づけるものだが、これはフランスの思想家ジル・ドゥルーズ(Gil Deleuze)とフェリックス・ガタリ(Félix Guattari)が「戦争機械」や

「器官なき身体」と呼び、⁵⁹⁾あるいは後述するフランスの社会思想家ブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) がアクター・ネットワーク理論で提示したネットワーク化による生成の複雑なプロセスへの問いと関わる。倫理は人間主体によって自律的に生成されるのではなく、異質な非人間や自然との非弁証法的な折り重なりの中で、⁶⁰⁾配分され生成されるのである。そこでのハイブリディティは、所与としての実体を前提せず、⁶¹⁾可能的かつ内在的条件による「生成されるべきもの」を意味している。

(3)非表象理論から複雑系へ イギリスの地理学者スリフトは1990年代後半に非表象理論を提示した。これは、初期ハイデッガー、後期ウイトゲンシュタインからモーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty) を介して、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) やミシェル・ド・セルター (Michel de Certeau) へと続く議論をより糸とするもので、身体化や言語化以前のものや状況付けられたものなど、人間の行為のつかみどころのなさをとらえようとする。表象や言説だけで一元的に説明される透明な世界を前提せず、出来事の流れの可能性を増幅するような実践の理論へと移行することで、表象と解釈に焦点を合わせた社会科学や人文科学をがらりと変えてしまうようなラディカルな企てである。

この非表象理論は既述のパフォーマティヴィティやハイブリディティの議論と結びついている。それは単に「実在」が生成される時間-空間をとらえようとするために実践やパフォーマンスに関心を向けるだけではない。⁶²⁾本稿のこの後の議論との関係からすると、次の二点が重要な共通点である。すなわちそれが身体か理性かの二項対立を乗り越える流動的な実践の理論を志向すること、そして調査実践 (すなわち客体化) そのものを問題化することである。⁶³⁾ウイトゲンシュタインの言語ゲームの議論をいささか乱暴に、コミュニケーションの規則とは、われわれが理解したとたんに見出

される「結果」でしかなく、他者にとって「意味している」ことが承認されるとき、そのかぎりにおいてのみ、「文脈」が立ち現れるものと要約すれば、⁶⁴⁾調査における対象もその成果の「報告」もまた先験的には実在しないはずである。調査も学問も主体と客体化を継続的に生産するパフォーマンスに過ぎない。

調査における客体化の問題は1980年代の人類学において、そして既述の通りジャクソンやコスグローヴによって、(地理的) 表象の危機として議論されてきたが、それらの議論では依然として観察する主体と観察される客体が固定され、そうした固定化をもたらす権力が問題とされていた。しかしラトゥールが実験室という小さな世界での実践と社会的事実の生産、実験室の「内」と「外」の決定不可能性を示したように、知識生産においては主体も客体も折り畳まれているのである。⁶⁵⁾ここでは事象の生成のプロセスが問われている。

スリフトはこの非表象理論から複雑系理論をさらに展開していく。それは単に身体によるパフォーマンスをとらえようとするだけではない。スリフトはつねに身体や感性を商品化すると同時に疎外する資本主義の新しい力の作用をとらえようとしてきた。というのも、現在の資本主義は情報技術を始めとする新しいテクノロジー、コンサルタント産業、MBAなどの新しい知の産業化をとおして、われわれの倫理を、身体というマイクロなスケールからそうした産業の世界的展開・配置というマクロなスケールにいたるまで、空間化しながら再編成しているからである。彼はこうした倫理の再空間化を「ソフトな資本主義」と呼ぶのだが、それはつねに(地理的) 知識生産という「資本の文化的循環 (cultural circuit of capital)」と名付けるべき作用を介している。⁶⁷⁾

資本主義はつねに身体を分節化しながら、人間の倫理を日常的な空間での実践をとおして屈曲させていく。そうすると身体や感性も主体によって構成されるものではなくなってしまう。むしろ身

体や感性への資本主義的力の作用によってはじめて主体なるものは立ち現れる。こうしてスリフトは情動の問題へと向かっていく。イギリスの地理学者ドリーン・マッシー（Doreen Massey）も時間／空間、内／外、精神／物質、主体／客体の複雑な褶曲を見つめながらそうした二分法が生じるプロセスと二分法を超えた、予想不可能な出来事において生じる新たな存在の生成プロセスの可能性を論じてきた。⁶⁸⁾ こうした議論はヨーロッパの人文地理学で2000年代初頭から盛んに議論されており、「存在論的転回（ontological turn）」⁶⁹⁾とも呼ばれる。

地理的事象の存在論的理解の特徴は、ある事象の顕現を関係的にとらえるところにあると言えよう。すなわち、所与としての地理的領域や空間や場所の理解を退け、他者や他所との交渉につねに開かれながらつねに作り直されつづけられる、相互浸透的で多孔的な空間、すなわち「空間性」としてそれらを理解する。また、場所や景観への感性もまた固定的なものではなく、やはり他者との関わりの中で作り直される。ここでは、場所、空間、景観だけでなく、それらへの帰属意識や感情もまた流動的・液状的なもの（liquidity）と理解され、液状的なものが凝固した（かのように見える）契機と装置と空間的配置が問題とされるのである。⁷⁰⁾

言語であれ記号であれ資本であれ何であれ、ここでは何かで容易に説明することが許されない。空間的配置をおこなう権力の主体はどこか外部にあるものでもない。主体も客体も簡単には設定されてはならない。そうした内と外の複雑な重なり合いに目を向け続けることが真に「政治的」営為となる。ここで脱構築されるべきものと措定されるのが⁷¹⁾（西洋）形而上学である。

IV 物質論的再転回？

(1) もう一人のクラング こうした1990年代のイギリスの地理学における存在論的転回へと向かう動向を、遺跡に関する事例研究をとおして体現

してきた一人がマイク・クラング（Mike Crang）⁷²⁾である。また、彼は近年の人文地理学における質的調査の復権においても重要な役割を果たしている。そこでここでは彼のマテリアリティの研究と質的調査の関わりに照準し、近年のマテリアリティの問題構制へと迫っていきたい。

クラングが事例として語る遺跡公園は集合的な記憶を生産する装置であり、一定のシニフィアンを有することで、そこを訪れる人びとに見るべきものや理解すべきものを指示する。しかし同時に彼は、ブルデューやド・セルトーに依りながら、それに回収され得ない人びとの実践を描き出すことで、真正性の経験が言語によって構築されているだけでなく、参加者の行為を通じても不断に創り上げられることを強調する。展示とそれを見る人びとの関係は決定不可能な事件／出来事であり、そこでの場所性や空間性はつねに作り直される。ゆえに、彼は言語ばかりで実践を考慮しない地理学は、死体置き場の地理学を生産する⁷³⁾と言う。

人びとの実践と場所での事件／出来事をとらえるために導入されるのが、エスノグラフィーである。クラングは *Progress in Human Geography* 誌で三回にわけて質的調査に関するレポートを担当し、エスノグラフィックな調査実践の可能性を検討する。⁷⁴⁾ また1995年に出版されたイアン・クック（Ian Cook）との共著 *Doing Ethnography* の⁷⁵⁾第二版を2007年に刊行している。先述の通り調査実践の問い直しは主体／客体の二分法を問題化することであり、そのための具体的な手法としての質的調査が提示されたのである。⁷⁶⁾

クラングにとって遺跡は形ある物質として存在するが、それはまた実践において現前する。物本性において実在し、実践をとおして現前する物質が、今度はわれわれにはね返ってきてわれわれの出来事を構成する。記憶も物質もアイデンティティの源泉ではない。⁷⁷⁾これがマテリアリティの議論である。

(2) アクター・ネットワーク理論の射程 クラ

ングが研究をスタートした1990年代初頭、人と事物との複雑な関係性を問題化する議論がフランスからイギリスへと導入されつつあった。それが「アクター・ネットワーク理論 (actor-network theory: 以下 ANT と略称)」である。ラトゥール、ジョン・ロー (John Law)、ミシェル・カロン (Michell Callon) らによって率いられたその理論では、行為主体の主体的行為がもたらす多方向のかつ多層的な影響力が注視されるのだが、この行為主体は人間に限らない。非・人間 non-human もまた行為能力を有し、人間/非人間の区分そのものの生成を問題にするため両者をあわせてアクタント (actant) と称する⁷⁸⁾。この理論の名称ではアクターとネットワークの間にハイフンが置かれている。アクターがネットワークを形成することは自明のことではないからだ。ANT は広い実践のネットワークの束に注目するが、それはつねに可変的であり、別の差異の固まりから結果的にネットワークとして立ち現れるものをとらえることで、ローカルな知識の再定義を迫る。そして、前述のワットモアやスリフトの議論もまた、この ANT に大きな影響を受けている。

既述のとおり、ラトゥールは「事実」が社会的構築物であるだけでなく、実験室という小さな世界での実践がその外側の社会性を作り上げていく複雑な内と外の関係性を民族誌的な調査実践によって論じた。科学者も研究という実践も「事実」もともに社会的なるものの構成を演じるアクターでありアクタントである。ここで目指されるのは、「サイエンス・ウォーズ」に代表されるような科学の虚構性の暴露ではまったくない⁷⁹⁾。そうではなく、西洋に自明のこととして実在する二項対立の問い直しが目指されているのである。

ラトゥールは主体/客体、精神/物質、人間/事物といった二項が自明ではなく、つねに何らかの構成体によって密かに媒介されてきたことを暴きながら、事物による人間存在への決定性を「事物の議会」と呼ぶ⁸⁰⁾。近代 (modern) はそうした二

分法を自明のこととしてきたが、実際には二項対立が何らかによって媒介されることで成立しているため、それは非近代 (amodern) である。このように自明のこととされる人間と事物の決定不可能性を、二項対立生成のプロセスを見つめることで暴き出すことこそがラトゥールにとってラディカルな政治的な企てなのである⁸¹⁾。

2002年、ラトゥールとともに ANT を牽引してきたカロンが、アクターによって取引が演じられることで立ち現れる「市場」そのものに関心を寄せない経済学を批判しながら、*The Law of the Markets* を編集した。カロンは経済学をも経済を演じるアクタントとして視野に入れながら、交換関係の分配配置を論じる。これに対して先述のミラーは、市場において変化するのはカロンの言うような経済的实践ではなく、市場のイデオロギーであり、交換という行為はそこに埋め込まれていると批判した。モースやブルデューを参照しながらインドやトリニダードにおける贈与交換を研究してきたミラーにとって、イデオロギーこそが贈与交換の実践感覚を作り出す。ここでは市場はイデオロギーに還元される。これに対してカロンは、ミラーの市場イデオロギーの前提を実体主義への墮落として批判し、再度、市場が行為能力の循環と遭遇によってその都度立ち現れることを強調する⁸²⁾。

カロンはさらに、資本主義を物象化する古くさい弁証法的な概念をミラーが保持しており、それは批判的検討なしに単に生産から消費へと議論の対象をスライドさせたにすぎないと論じる。つまり合理的な選択を行なうイデオロギーに埋め込まれた消費者が依然として前提されているのであり、そうして資本主義をより抽象的にすることで資本主義の暴力を支えてしまうのである。ローカルな出来事に注目する ANT では、対立する二項を前提とする弁証法は、差異、裂け目、翻訳の増大によって取って代わられる⁸³⁾。

では言語や表象の生産から、物質や消費へと転

回した人文地理学ではどうなのだろうか。

(3) マテリアリスト・リターンズ フランスの哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida) はインタビューの中で、彼にとっては物質ではなく、物質が二分法によって分節化されたときに残される物質の痕跡が重要なのだと応えている。⁸⁴⁾ なぜなら、物質の痕跡は物質がそこに不在であるにもかかわらずそこに過剰な意味を徴づけてしまうことで、分法の決定不可能性にもかかわらずそれを可能にした原暴力を表してしまう代補だからである。デリダにとって重要なのは物質ではなく物質が残してしまう身振りであり物質性である。

物質論的転回を主唱したジャクソンは、言語や表象を離れて地に足のついた現実世界の消費と物質に注目した。ファイロやロレッタ・リースもまた言語だけでなく物質的なものへの注意を呼びかける。そうした態度は、現在の文化の物質性の分析をばやけさせるテクスト論的な方法論の支配に対抗するべきものだった。

しかし、物質をただ「現実」と見なすことは、エクリチュールに先立つものとしてパロールを純粹な根源とすることの原暴力を暴いたデリダからすれば、西洋形而上学の身振りを反復することになる。⁸⁵⁾ こうした批判がマシュー・キーンズ (Matthew Kearns) によって提出された。⁸⁶⁾ 彼はジャクソン、ファイロ、リースによる主張の身振りが、ミラーのそれと同一であることを見破る。すなわちミラーは、客体は主体の認識をとおして立ち現れ、両者の矛盾によって主体が止揚されるという風に弁証法的にマテリアリティを理解しており、その意味でヘーゲル学派的である。同様に、ジャクソン、ファイロ、リースもまた、物質を本質的、純粹、基盤的、普遍的、外的なるものとすることで物質的なものを本質化し、それによって西洋形而上学の身振りを反復してしまっているのである。キーンズは、物体は物体として主体との外化と内化を繰り返しながら行為するのであり、地理学にとって物質 (matter) こそが問題・

重要 (matter) だとする。普遍的で外的な物質的なものではなく、物質それ自体がその痕跡や身振り、あるいは言説や表象をとおしてあたかも現実的かつ実在的なものとして立ち現れるプロセスをとらえること、それがマテリアリティの議論の射程なのである。⁸⁷⁾ そうした陳述は、パフォーマンス・ヴィティ、非表象理論、複雑系理論、ANT などの議論を介して可能となることは言うまでもない。

2002年9月、物質論的転回の問題を乗り越えるべく、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジで若手研究者たちによる会議「物質の諸地理 (material geographies)」⁸⁸⁾ が開催された。この会議での発表内容の多くはすでに論文としてそれぞれ発表されている。音楽という非物質をとおして故郷のアイデンティティや記憶がどう刺激されるのか、南アジアからイギリスへ渡った移民の住宅のリビングルームに飾られた絵画がどのように故郷のアイデンティティを喚起するのか、衣服という物質が試着室でどのように人間の感性を作るのかが発表されている。それぞれはマテリアリティの議論を行なっているものの、同時に音楽による人間の感情の刺激 (affect)、移民のアイデンティティとディアスポラやハイブリディティ、衣服とイントラ・アクティヴィティというように、これまでマテリアリティとは別項目として紹介してきたテーマと不可分である。このこともまた、マテリアリティとこれまでの議論の軌跡との並行関係を示している。

では、並行するトピック群はどのようなプロジェクトへと向かっているのだろうか。それが「人間を超えた世界 (more than human world)」⁸⁹⁾ すなわちポスト・ヒューマニズムの理解である。

V おわりに——人間を超えた世界への入り口に立って

1980年代後半よりイギリスの人文地理学において起こった文化論的転回は、いくつもの軌跡から

構成された新しい方向性を持つ学問的態度の束であった。それらは景観や場所や空間を言説や表象や権力というキーワードによって理解する傾向を有していた。文化はナイーヴな理解を離れて政治化され、社会地理学という名辞に接続された。しかし、そこでは依然として文化を説明の残余として用い、言語に還元されるものとして物象化していた。

文化は単なる言語的構築物なのかという議論は、一見すると文化と経済と政治の複雑なもつれ合いへの注視へと向かったように思われる。そして文化論的転回の言語の実体化の傾向は批判され、現実世界やその物質的基盤へと再転回した。

それでは分節化される経済とはいったい何なのか。政治とは何なのか。イデオロギーの主体とは何なのか。そして言語とそれに対置される物質や現実とは何なのか。あるものとあるものがもつれ合うというとき、それぞれの項がすでに設定されている。さらに、上記の事項にアプリアリナ区分がどのようにもうけられたのかという存在論的な議論へと転回する。

ジェンダー研究を中心に展開されたパフォーマンス・ヴィティの議論は、身体空間をジェンダー研究の中心的な舞台に設定した。そしてその身体への言説的実践だけでなく物質的实践によるその場その時限りでのローカルな政治学が、物体性やインタラクティブ・アクティビティの議論をとおして問題化された。また、言説化できないパフォーマンスは非表象理論や複雑系理論をとおしても論じられた。文化はそうにしてつねに資本化される。さらに人間と非人間を含むアクタントのパフォーマンスをとおして局所的に世界が形成され、そうした人間と事物がともに世界を形成するローカルなプロセスをとらえることこそが政治的であるとする ANT も盛んに吸収されて議論がなされたのである。

こうして物質はさらに問題化されることとなった。それが現在のイギリスの人文地理学における

マテリアリティの問題である。物質が重要なのではない。物質が持つ物体性とそれが残す身振りの痕跡が、またそうした物質と人間との関わりの中で行なわれる事象の生成が問題なのである。

かつて重層的決定を提起することで『資本論』を大胆に読み書き直したフランスの思想家ルイ・アルチュセール (Louis Althusser) は、世界は偶然であるという「偶然の唯物論」へ最終的にたどり着いた。それはほかのものすべてに対する物質性の優位を主張することであり、その物質性とは単なる身振りの痕跡であると言う。世界は予定調和ではない。この主張にアルチュセールがたどり着くために経由したのがバールーフ・デ・スピノザ (Baruch De Spinoza) である。スピノザの『エチカ』では人間倫理の内と外が折り畳まれており、西洋形而上学への脅威である⁹⁰⁾。

もちろん議論は言説か物質かではないし、それらを安易に対立させることでもない。単一性 (singularity) や線条性 (linearity) が退けられる。言語も (エクリチュールもパロールも) 物質もともにそれが痕跡を標記するために重要となる。だから本稿のタイトルは決してミシェル・フーコーの邦訳著書『言葉と物』のパロディではない。フーコーの思想はしばしば時代とテーマによって区分されるが、彼はつねに、言葉と物、内と外が折り畳まれながら社会的なるものを構成する「ダイアグラム」の空間的配置を説いてきた。権力とはそうして織りなされる分配・配置なのである⁹²⁾。実際、ローは ANT がフーコーやドゥルーズらの議論と関わりを持つと表明している⁹³⁾。

ここで取り上げてきたマテリアリティ、インタラクティブ・アクティビティ、ハイブリディティ、複雑系理論などはすべて、このような西洋形而上学を乗り越えようとする試みであり、それぞれ論点の比重を変えながら顕れたものと言えよう。人間/自然、主体/客体の二項対立を絶えず設定する形而上学は、弁証法によって止揚され最終的には主体が優位づけられる人間中心主義 (ヒューマニズ

ム)を基底に持つ。この西洋形而上学はさまざまな二項対立の身振りの反復において延命されてきたが、同時にそれに対するはかない乗り越えの試みもニーチェやフーコーやドゥルーズやデリダによってなされてきた。ポスト・ヒューマニズムと称されるこの企ては、現在のヨーロッパ人文学で多く見いだされる⁹⁴⁾。そして地理学においてもポスト・ヒューマニズム、つまり人間を超えた世界の理解が目指される。存在論をもとに空間を論じてきたマッシーは *For Space* で、スリフトは *Knowing Capitalism* と *Non-Representational Theory* の二つの著書で答えを出した。地理学者が対象としてきた「地域」なるものも審問に付す存在論的理解もまた、空間の出来事に照準する⁹⁵⁾。

本稿はこうした人間中心主義を超える問題設定が、イギリスの人文地理学においてどのように発見され問題化されてきたのかをたどってきた。そこにはいくつもの軌跡が見いだされた。それぞれの軌跡の力点は不均等ではあったが、議論の軌跡を見取り図として断片的に提示することでようやく2000年代後半の議論の問題構制が理解される。したがってこの後には、この論文で取り上げられたトピックを含めてそれぞれの思想的背景を示しながら、人文地理学の問題をより広い文脈でとらえる作業が必要になる。また、今回提示された議論の入り口からさらに展開された種別的な議論へと向かうことも必要であろう。一例を挙げれば、マテリアリティの議論は、テクノロジーの道具主義的理解を避けながら管理・監視社会の議論や、情動 (affect) の議論と接合されていく⁹⁶⁾。人間の感情 (emotion) やアイデンティティは言語によって主体の内部において構築されるのでなく、近年の情報テクノロジーという物質を介して多方向へとはね返っては喚起される⁹⁷⁾。そうした情動・刺激をとおして主体なるものがはじめて立ち上がる。感情、なかんずく主体は資本化されているのである。

かつては、地理的知を構成するモダニティの権力に対する「地理的想像力 (geographical imagina-

tion)」が求められた。しかし現在はこうした倫理や感情を構成する複雑な技術のプロセスを理解するための「地理的感性 (geographical sensibility)」も求められているのである。これらの新しい議論を世代間闘争に安易に還元させて理解することは、二分法の身振りを再生産するだけだ。西洋形而上学の難問を超えるための試みが単なる知的ファッションなのか、失敗に終わるのか、それとも達成されるのかは、今も続けられる議論の「出来事」に拠るのである。

(三重大学人文学部)

注

- 1) カフカ (池内 紀訳) 『橋』『カフカ短編集』岩波書店、1987、220頁。
- 2) アルチュセール (今村仁司訳) 『哲学について』筑摩書房、1995、47頁。
- 3) 大城直樹・丹羽弘一・荒山正彦・長尾謙吉「1980年代後半の人文地理学にみられるいくつかの傾向—イギリスの最近の教科書から—」地理科学48-2、1993、91-103頁。
- 4) Pryke, M, Rose, G. and Whatmore, S. eds. *Using social theory thinking through research*, 2003, Sage. 執筆者はオープン・ユニヴァーシティの地理学科スタッフのほか、ナイジェル・スリフト (Nigel Thrift) とマイク・クラング (Mike Crang) で、この構成は現在の人文地理学の動向をはっきりと印づけている。各章のタイトルは次のとおりである。A question of language/The play of the world/A body of questions/Imaging the field/Generating materials/Practicing ethics/Telling materials/Writing reflexively/Situated audiences.
- 5) しばしば英語圏という言葉でまとめられるが、イギリスとアメリカの人文地理学の間には多くの差異がある。日本では実証主義的と理解されがちなイギリスの人文地理学を中心とする雑誌は、しかし英語圏地理学の理論的発展の重要な源泉であり続けた。本稿では基本的にイギリスにおける理論的展開を考える。
- 6) 前掲3) および、成瀬厚「わが国の地理学における文化研究に向けて」地理科学49-1、1995、95-108頁。
- 7) (1)ジャクソン (徳久球雄・吉富 亨訳) 『文化地理学の再構築—意味の地図を描く—』玉川大学出版会、1999。(2)ジョンストン (竹内啓一訳) 『場所をめぐる問題—人文地理学の再構築のために』古今書院、2002年。このほか景観のテキスト論をめぐる論争については、(3)今里悟之「景観テキスト論をめぐる英語圏の論争と今後の課題」地理学評論77-2、2004、483-502頁がある。今里論文は文化景観論をめぐる議論を図式的に描き出すことに貢献しているが、記号論や構造主義の理解のどこを以て外にも、物象化をめぐる議論の背景の紹介が十分ではないように思われる。本稿はその

- 物象化をめぐる議論を紹介することにもなる。
- 8) (1)泉谷洋平「人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論—英語圏における理論的論争をめぐる—」空間・社会・地理思想 8, 2003, 2-22頁。(2)加藤政洋「ポストモダン人文地理学とモダニズム的「都市へのまなざし」—ハーヴェイとソ ज्याの批判的検討を通して—」人文地理51-2, 1999, 48-66頁。
 - 9) この質的变化は英語の雑誌のタイトルを一瞥すれば分かるが、それを量的に示すとすると不可能だし意味がないと思われる。もちろん、この新しいアプローチがイギリスや英語圏の人文地理学の全体を代表しているというつもりもない。しかしたとえば、ナイジェル・スリフト (Nigel Thrift) は2002年の論文「地理学の未来」においてこの十年間地理学の四つの成功を挙げている。すなわち自然地理学が自然科学においてめざましい活躍をしていること、空間論的転回を遂げた人文社会科学における人文地理学の影響の高まり、エスノグラフィーなどの質的調査の興隆、ドリーン・マッシー (Doreen Massey) などに代表されるようなよく知られた知識人として地理学者が公的な場で活躍をしていることである。第二の人文地理学の影響の高まりにおいて、スリフトは景観と自然の関係に関する研究が果たす役割を評価する。ただしその関係は小林が強調するようなナイーヴなものではない。そもそも小林が批判する自然への視点を欠いた新文化地理学とは何を指しているのか? そして実際には文化地理学においては自然に関する論文は増加している。ただしそこでの自然は、人間主体の鏡ではなく、弁証法的関係を超えて人間に働きかける力を持つ能動的な「主体」である。この関係は人間/自然、主体/客体の二分法を自明視せずそれを乗り越えるものである。(1) Thrift, N., 'The future of geography', *Geoforum* 33, 2002, pp. 291-298. (2)小林茂「環境と開発」人文地理 55-3, 2003, 67-71頁。
 - 10) Mori, M., 'Translation and transformation: transactions in Japanese social and cultural geography', *Social and Cultural Geography*, 9, 2009 (forthcoming).
 - 11) Cosgrove, D. and Jackson, P., 'New directions in cultural geography', *Area* 19, 1987, pp. 95-101.
 - 12) Philo, C. ed., *New words, new worlds: reconceptualising social and cultural geography*. 1991, Cambrian Printers.
 - 13) 前掲12) p. 1.
 - 14) 前掲12) p. 2.
 - 15) 前掲11)
 - 16) ともに前掲11), p. 99および p. 95.
 - 17) たとえば、ウィリアムズ (小池民男訳)『文化とは』晶文社, 1985.
 - 18) その中で彼はその後の地理的想像力に関する議論の源泉となるエドワード・サイード (Edward Said) のオリエンタリズムやポスト構造主義の考えには当時あまり影響を受けていないことも述べている。(1) Jackson, P., 'Geography and the cultural turn', *Scottish Geographical Magazine*, 113-3, 1997, pp. 186-188. なおジャクソンは地理的表象の危機を、(2) Jackson, P., 'Guest editorial', *Environment and Planning D: Society and Space*, 9, 1991, pp. 131-134でも表わしている。今里は景観のテキスト的理解を村落にも応用する必要性を主張しているが(前掲7)(3), 新しい文化地理学のこうした表象の危機意識を念頭に置いたら、そうした主張は批判的視点を欠いたまま「〇〇地理学」が増殖する系統地理学的な墮落を反復してしまう。
 - 19) Kong, L., 'A "new" cultural geography?: debates about invention and reinvention', *Scottish Geographical Magazine*, 113-3, 1997, pp. 177-185. および前掲18) (1).
 - 20) Blaut, J., 'A radical critique of cultural geography', *Antipode*, 11, 1979, pp. 25-29.
 - 21) ただし、スーザン・スミス (Susan Smith) によると、地理学と人類学が文化より社会に関連しているイギリスでは、ダンカンの論文の効果はそれ程大きくなかった。スミスはダンカンの文化超有機体説批判が、なぜアメリカの文化地理学者がこの観念を支持したのか明らかにしていないこと、超有機体としての文化の否定が、結局は文化の自己形成から個人の自己形成へと移行しただけに過ぎないことを批判している。Smith, S., 'Classics revisited: the superorganic in American cultural geography', *Progress in Human Geography*, 22, 1998, 567-574.
 - 22) Gregory, D. and Ley, D., 'Culture's geographies', *Environment and Planning D: Society and Space* 6, 1988, pp. 115-116.
 - 23) Duncan, J. and Ley, D., 'Introduction: representing the place of culture', (Duncan, J. and Ley, D. ed. *Place/culture/representation*, Routledge, 1993), pp. 1-21.
 - 24) 前掲23) p. 10ではたしかに次のように述べられている。「読者は(テキスト, 外テキスト, 間テキスト)の関係記録することにより) 著者が意図したものとは異なるテキストの解釈を生産する可能性があり、それゆえに解釈学的循環へと拡張するのである。テキストには読者が存在するかぎり、その再生産は続く。この意味で表象は集合的であるばかりでなく、反復のプロセスなのである」。新しさを主張する地理学のテキスト論や記号論で、いつの間に読者の問題は消えたのだろうか。
 - 25) たとえばグレゴリーはハーヴェイに代表される批判地理学の伝統に、言説や移動の理論を付け加えながらモダニティが作り出す場所や景観の表象に検討を加える。Gregory, D., *Geographical imaginations*, Blackwell, 1994.
 - 26) Price, M. and Lewis, M., 'The reinvention of cultural geography', *Annals of the Association of American Geographers*, 83, 1993, pp. 1-17. これに対してレスター・ローントリー (Lester Rowntree) は伝統的な地理学もまた同様の傾向を持っていたことを冷静に指摘しながら、新しい/伝統的という二分法の無意味さと危険さを説く。Rowntree, L., 'Orthodoxy and new directions: cultural/humanistic geography', *Progress in Human Geography*, 12, 1988, pp. 575-586.
 - 27) Peet, R., 'Review of *The city as text: the politics*

- of landscape interpretation in the Kandyan Kingdom by J. S. Duncan', *Annals of the Association of American Geographers*, 83, 1993, pp. 184-187.
- 28) 前掲27) 186頁。
- 29) ミッチェル (森 正人訳)「文化なんてものはありゃしねえー地理学における文化観念の再概念化に向けてー」空間・社会・地理思想7, 2002, 118-137頁。その後のやり取りは, 'Exchange: there's no such thing as culture?', *Transactions of the Institute of British Geographers*, N. S., 21, 1996, pp. 572-582.
- 30) 「クリティカル・インフラストラクチャー」は社会学者シャロン・ブーキンが, ニューヨークのジェントリフィケーションを説明するときを作り出した語で, それは商品のコンビネーションを巧みに作り出すことで, 文化的な嗜好性を方向付けていく働きをする。専門家, ジャーナリスト等の混淆によって構成されるこのクリティカル・インフラストラクチャーは, 結局のところはとらえどころのないエージェンシーであり, 彼らが「民意」を誘導しようと意図しているかどうか不明である。そしてこの不明瞭さが本稿の後の議論で重要となる。ブーキン (森正人・松田いりあ訳)「ジェントリフィケーションとヌーベル・キウイジーヌ」社会学雑誌21, 2004, 108-126頁。
- 31) 言葉の表面を見ていれば, ダンカンとミッチェルの景観をめぐる議論は景観を表象としてみるか物質としてみるかの違いとしてまとめられるかもしれない。しかしミッチェルとダンカンの論争は「文化」をめぐる物象化の問題から始まっているのであり, 物象化の問題構制からすれば, 物が表象かの問題ではなくそもそも物と表象をめぐる(文字通り「めぐる」)問題であることが分かる。ミッチェルは, 表象か物質かという問題を越えた言葉と物質によって構成される「正義の景観」の顕れを説く。ミッチェル (森 正人訳)「文化景観—それはただの景観かそれとも正義の景観か?—」地理科学61-1, 2006, 40-49頁。
- 32) たとえば, Rodriguez-Pose, A., 'Killing economic geography with a "cultural turn" overdose', *Antipode*, 33-2, 2001, pp. 176-182. しかしだからいったい何が悪いのだろうか。地図を描くことではなく空間や場所について考えることが地理学者の役目ではないか。
- 33) Barnes, T., 'Rethorizing economic geography: from quantitative revolution to the "cultural turn"', *Annals of the Association of American Geographers*, 91-3, 2001, pp. 546-565. 加藤が示したポストモダン的なパースペクティブをめぐる議論も, この新しい経済地理学でのハーヴェイの批判的理解の中に位置づけられうる。前掲8) (2)
- 34) Barnett, C., 'Cultural twists and turns', *Environment and planning D: Society and Space*, 16, 1998, pp. 631-634.
- 35) Sayer, A., 'Cultural studies and "the economy, stupid"', *Environment and Planning D: Society and Space*, 12, 1994, pp. 635-637.
- 36) セイヤーの批判実在論については泉谷のすぐれたレビュー (前掲8) (1)) も参照されたい。セイヤーは, ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の文化資本の議論を批判し, アマルティア・セン (Amartya Sen) の経済活動における人間の倫理的要因を強調する議論, さらに新アリストテレス派と称されるアラスデア・マッキンタイア (Alasdair MacIntyre) の美徳や「内的な価値」の考えを発展させながら論を展開する。(1)マッキンタイア (篠崎 栄訳)『美徳なき時代』みすず書房, 1993。(2)Sayer, A., 'The dialectic of culture and economy', (Lee, R. and Wills, J. ed. *Geographies of Economies*, Arnold, 1997), pp. 16-26.(3)Sayer, A., 'Critical and uncritical cultural turn', (Cook, I., Crouch, D., Naylor, S. and Ryan, J. eds. *Cultural turn/geographical turn: perspectives on cultural geography*, Arnold, 2000), pp. 166-181.(4)Sayer, A., '(De) commodification, consumer culture, and moral economy', *Environment and Planning D: Society and Space*, 21, 2003, pp. 341-357.
- 37) セイヤーは言及しないものの, この上部構造と下部構造の相互規定はルイ・アルチュセール (Louis Althusser) が練り上げた重層決定のアイディアを想起させる。アルチュセールはマルクスの資本論を, スビノザの一元論をとおして読み直す中で, 下部構造による上部構造の基底が純粋状態では生じることがなく, 上部構造と下部構造が重層的に決定するとした。もちろん, 最終審級は下部構造が決定するものの, 最終審級という「孤独な時の鐘」が鳴ることはない。この重層決定をスチュアート・ホールは「節合」という語でとらえ直し, アイデンティティや主体生成の複雑性を提示している。筆者もまたこの重層決定や節合のアイディアをもとに, 文化と経済と政治, 表象と物質, 意味のエンコーディングとデコーディングの重層性を提示した。(1)アルチュセール (河野健二・田村 俊・西川長夫訳)『マルクスのために』平凡社, 1994。(2)森正人「節合される弘法大師と日本文化—1934年の弘法大師文化展覧会を中心に—」地理学評論78-1, 2005, 1-27頁。
- 38) クラング (森 正人訳)「文化論的転回と経済地理学の再構成」空間・社会・地理思想9, 2004, 54-71頁。
- 39) 前掲36) (2)。
- 40) 実際, クラングは自らの大学生時代のアルバイト先であったレストランで参与観察を行い, そこでの装飾のみならず, 給仕の衣装や振る舞いといった文化的なるものが, いかにして消費の欲望を作り上げていくのか明らかにしている。彼にとって, 経済的なるものは文化的な振る舞いと不可分である。Crang, P., 'It's show time: on the workplace geographies of display in a restaurant in southeast England', *Environment and Planning D: Society and Space*, 12, 1995, pp. 675-704.
- 41) 彼は次のように言う。「私の好みから言えば, 組織化された文化の生産, 流通, 消費がどのようにして概念的なレンズの領域をとおして捉えられうるのか, それは(マルクス主義的な)政治経済学の排他的な貯蔵とどう違うのかを問うことが……戦略的に不在である」。Crang, P., 'Book reviews: Don Mitchell *Cultural geography: a critical introduction*', *Social & Cultural Geography*, 2, 2001, p. 491.
- 42) コンは, ミッチェルに対するジャクソンのこの態度

- を「健全」だと評する。この他、コンは、領域性、ナショナルリズム、国民アイデンティティ、国家的な神話の創造に立ち返りながら、グローバルな文化の観念、社会・文化的な意味でのグローバルとローカルの結びつきについての精査を拡張する必要性を説いている。前掲19)。
- 43) 前掲18) (1)。ジャクソン自身は物質への注視が消費文化の解明にどのようにつながるのかを明示してはなないが、おそらくそれは商品という物質が価値に対して持つ「呪物的性格」に関するマルクス主義的理解に関わると思われる。すなわち使用価値および交換価値の二面性をもつ商品という物質の価値は、労働生産物の物理的な性質やそこから生じる物的な関係とは関係をもたない。それは社会的諸関係に織り込まれた社会的な物として現れる。マルクス (大内兵衛・細川嘉六監訳)『資本論1』大月書店、1968。
- 44) Jackson, P., 'Rematerializing social and cultural geography', *Social & Cultural Geography*, 1, 2000, pp. 9-14.
- 45) Miller, D., Jackson, P., Thrift, N., Holbrook, B. and Rowlands, M., *Shopping, place and identity*, Routledge, 1998.
- 46) (1) Lees, L., 'Rematerializing geography: the "new" urban geography', *Progress in Human Geography*, 26-1, 2002, pp. 101-112. (2) Philo, C., 'More words, more worlds', (Cook, I., Crouch, D., Naylor, S. and Ryan, J. eds. *Cultural turn/geographical turn: perspectives on cultural geography*, Arnold, 2000), pp. 26-53.
- 47) その考えは次のような言明に端的に現れている。「人間性はそれ自身が生産するものに先行しない。先行するものは客体化のプロセスであり、それらが自律的な主体と客体として現れるものを生産するのであり、客体あるいは制度を用いる人間について考えることが重要である」。Miller, D., 'Materiality: an introduction', (Miller, D., ed. *Materiality*, Duke University Press, 2005), p. 10.
- 48) この関心の中心的な概念を構成する「身体技法」とは人類学者マルセル・モース (Marcel Mauss) によって命名されたもので、彼は身体という生理的存在にも、一定の方向付けとハビトゥスが文化的・歴史的に刻印されていると考えた。人類学におけるパフォーマンスへの関心は儀礼への注目と結びついていた。この儀礼や実践における身体技法についてはマイケル・ポランニー (Michael Polanyi) の「暗黙知」やブルデューの「ハビトゥス」といった概念が有効であり、研究が蓄積されつつある。
- 49) (1)バトラー (竹村和子訳)『ジェンダートラブル』青土社、1999。なおオースティンは、言語の機能を概念的に事実確認的機能と行為遂行的機能に分類し、真偽ではなく適切/不適切を基準とすべき言語の行為遂行的機能について詳述する。行為遂行性のなかでも、発話行為をとおして約束の行為を遂行する発語内行為を中心に分析をすすめる。(2)オースティン (坂本百大訳)『言語と行為』大修館書店、1978。
- 50) そしてセックス/ジェンダーのアイデンティティは「演じられる幻想であり体内化である (中略) そのような行為や身ぶりや演技は、それらが表出しているはずの本質やアイデンティティが、じつは身体的記号といった言説手段によって捏造され保持されている偽造物にすぎないという意味で、パフォーマンス的なものである」とされる。前掲49) (1)240頁。
- 51) Nash, C., 'Performativity in practice: some recent work in cultural geography', *Progress in Human Geography*, 24, 2000, pp. 653-664.
- 52) たとえば(1) Whatmore, S., *Hybrid geography*. 2003, Sage. こうした批判は様々な場で表明されており、それらを見取り図的に示したのとして、(2) Colls, R., 'Materialising bodily matter: intra-action and the embodiment of "fat"', *Geoforum*, 38, 2007, pp. 353-365.
- 53) ジェーン・ベネット (Jane Bennett) は次のように言う。「リアリティはそれ自体の中の事物、あるいは現象の陰に隠れた事物によってではなく、現象の中の「事物」によって構成される。世界はそれぞれ異なる物質化におけるイントラ・アクティヴィティなのである」。Bennett, J., 'The Force of Things: steps toward an ecology of matter', *Political Theory*, 32, 2004, p. 817. 地理学におけるイントラ・アクティヴィティの議論の整理については、前掲52) (2)。
- 54) フランスの哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida) はこうした働きを「代補」という語で表している。それは何かを代理表象しながら、意味の過剰と欠如を示してしまい、それにより単純な対立を乱す。そのとき代理表象のプロセスの暴力を露呈させてしまう。
- 55) corporeality は分節化以前に「ある」ものであり、ここでは物体性と訳したが、身体の問題としてとらえるばあいには「身」と訳すこともできる。市川 浩『精神としての身体』講談社、1992。ただし、分節化以前にある物体が物体として知覚されるのは、それとして分節化 (意味的所知) されねばならない。これを廣松渉は関係の第一次性における「二肢的二重性」と呼ぶ。廣松渉『もの・こと・ことば』筑摩書房、2007。
- 56) 女性の身体が持ってしまう物体性の議論はリュス・イリガライ (Luce Irigaray) に多くを依っており、ローズのこの言明もしかりである。Rose, G., 'A body of questions', (前掲4)), pp. 47-64.
- 57) ハラウエイ (高橋さきの訳)『猿と女とサイボーグ—自然の再発明』青土社、2000。
- 58) (1) Whatmore, S., 'Dissecting the autonomous self: hybrid cartographies for a relational ethics', *Environment and Planning D: Society and Space*, 15, 1997, pp. 37-53. これは前掲52) (1)に収められている。
- 59) (1)ドゥルーズ・ガタリ (市倉宏祐訳)『アンチ・オイディプス—資本主義と分裂症』河出書房、1986。(2)ドゥルーズ・ガタリ (宇野邦一・豊崎光一訳)『千のプラトーン—資本主義と分裂症』河出書房、1994。
- 60) ジェイムズ・プロクター (James Proctor) によると、倫理をめぐる問題は1990年代に爆発的に増加し、とりわけ1996年の前半期だけで倫理をタイトルに冠した英文の論文や本の数は300以上であり、しかも多様な学問分野からのアプローチがこの時期の特徴だとされる。例として国際移住、自殺、自然、ゲイの権利、マルチカルチュラリズム、戦争の平和が倫理と結びつ

- けられて語られることが挙げられる。プロクターは、地理学からのこうした新しい倫理への取り組みへの参画はあまりないもの、空間的存在論、社会的正義の場所や空間の検討などをとおしてそれが可能だと主張する。しかし、彼の議論では「道徳」と「倫理」がしばしば混同して、使われていることが問題である。両者を明確に区分することは困難だが、ファイロの道徳の地理学がイデオロギーに屈曲したパースペクティヴの批判的検討を含意していたのに対して、近年の倫理の地理学はイデオロギー的呼びかけを行なう「主体」なるものを前提とせず、非人間や多方向的な情動の刺激による持続的な主体の生成を問題にする点で異なると思われる。1990年代の地理学における倫理の問題のレビューとしてそのほかに、Smith, D., 'Geography and ethics: a moral turn?', *Progress in Human Geography*, 21-4, 1997, pp. 583-590.
- 61) Thrift, N., *Spatial formation*, Sage, 1996.
- 62) Hinchliffe, S., 'Performance and experimental knowledge: outdoor management training and the end of epistemology', *Environment and Planning D: Society and Space*, 18, 2000, pp. 575-595.
- 63) 「パフォーマンスの理論と実践を捉えることは、われわれに鮮やかな結論を与えはしないが、理論的な議論をわれわれの調査実践へと近づけさせ、新たなエクサイディングなハイブリッドを創り出す」。Thrift, N. J. and Dewsbury, D., 'Dead geographies- and how to make them live', *Environment and Planning D: Society and Space*, 18, 2000, p. 430.
- 64) ウイトゲンシュタインの言語ゲーム論については次のものを参考にした。(1)橋爪大二郎『言語ゲームと社会理論』勁草書房, 1985。(2)永井 均『ウイトゲンシュタイン入門』筑摩書房, 1998。
- 65) ラトゥール (川崎 勝・高田紀代志訳)『科学がつくられているとき—人類学的考察』産業図書, 1999。
- 66) Thrift, N., 'The place of complexity', *Theory, Culture & Society*, 16-3, 1999, pp. 31-69.
- 67) (1)Thrift, N., 'The rise of soft capitalism', *Cultural Values*, 1, 1997, pp. 29-57. (2)Thrift, N., 'Chasing capitalism', *New Political Economy*, 6-2, 2001, pp. 375-380. スリフトの資本主義の理解は、ドゥルーズとガタリに影響を受けている (前掲59) (1)(2)。
- 68) Massey, D., *For space*, Sage, 2005.
- 69) フランスにおける現代思想においても、ドゥルーズやデリダを参照した存在論が盛んだとされる。(1)Hallward, P., 'The one or the other: French philosophy today', *Angelaki*, 8-2, 2003, pp. 1-32. イタリアの思想家のジョルジョ・アガンベン (Giorgio Agamben) はハイデガーやフーコーの思想からは決定不可能な契機を「グレーゾーン」「ホモ・セケル」「開かれ」という言葉で思索している。さらに同じくイタリア出身でフランスで活躍するマリツィオ・ラッツァラート (Maurizio Lazzarato) は、アガンベンによるフーコーの生政治学の用法を批判し、ガブリエル・タルドの哲学をより糸にしなが、異質性が混淆する空間における出来事の政治的可能性を説く。(2)アガンベン (岡田温司・多賀健太郎訳)『開かれ—人間と自然—』平凡社, 2004。(3)ラッツァラート (村澤真保 呂・中倉智徳訳)『出来事のポリティクス』洛北出版, 2008。
- 70) 2004年の *Geografiska Annaler* 誌 86B 巻 1 号は、マッシーをゲスト編集者に招き、特集「関係的な空間の政治的問題 (The political challenge of relational space)」を組んだ。この特集には、マッシー自身のほか、ジョン・アレン (The Whereabouts of Power), リンダ・マクドウェル (Masculinity, Identity and Labour Market Change), アッシュ・アミン (Regions unbound), ナイジェル・スリフト (Intensities of Feeling) が収められている。このうち、アミンとスリフトの論考は次のとおり訳出されている。(1)スリフト (森 正人訳)「感情の強度—情動の空間的政治学にむけて—」空間・社会・地理思想11, 2007, 58-82頁。(2)アミン (森 正人訳)「開かれた地域—場所の新しい政治学に向けて—」空間・社会・地理思想12, 2008 (印刷中)。
- 71) 今里は人文主義地理学や現象学的地理学の「本質」が誤解されており、一元論的哲学を背景に持つ日本の人文主義的研究が挑戦できると主張する。しかしデリダがフッサールの批判で鮮やかに示したように、現象学的還元をしたところで主体の根源には遡及されないのだから、主体なるものが担保されることは永遠にない。そして英語圏地理学の主体をめぐる議論はもはや人文主義地理学の本質が誤解されたというような次元にはないので、日本の思想の「挑戦」はドンキホーテ的で、空振りにおわるのではないか。しかももっと深刻なことは、西洋の知に対して東洋の知を対置させることで西洋形而上学を克服できるという考えが、結局のところ二項対立を作り出す形而上学の罠に陥り、形而上学の身振りを反復してしまうことである。Imazato, S., 'Rethinking the humanistic approach in geography: misunderstood essences and Japanese challenges', *Jimbun Chiri*, 59, 2007, pp. 508-532.
- 72) (1)Crang, M., 'Spacing time, timing spaces and narrating the past', *Time & Society*, 3, 1994, pp. 29-45. (2)Crang, M., 'On the heritage trail: maps of and journeys to olde Englande', *Environment & Planning D: Society and Space*, 12, 1994, pp. 341-355. (3)Crang, M., 'Envisioning urban histories: Bristol as palimpsest, postcards, and snapshots', *Environment & Planning A*, 28, 1996, pp. 429-52. (4)Crang, M., 'Living history magic kingdoms or a quixotic quest for authenticity?', *Annals of Tourism Research*, 23, 1996, pp. 415-431.
- 73) Crang, M., 'Knowing, Tourism and Practices of Vision', (Crouch, D., *Leisure/tourism geographies: practices and geographical knowledge*, Routledge, 1999), p. 248.
- 74) (1)Crang, M., 'Qualitative methods: the new orthodoxy?', *Progress in Human Geography*, 26, 2002, pp. 647-655. (2)Crang, M., 'Qualitative methods: touchy, feely, look-see?', *Progress in Human Geography*, 27, 2003, pp. 494-504. (3)Crang, M., 'Qualitative methods: there is nothing outside the text?', *Progress in Human Geography*, 29, 2005, pp. 225-233.

- 75) Crang, M., and Cook, I., *Doing ethnography* (2nd edition), Sage, 2007. 彼らは1990年代初頭に広まった「記述」の詩学と政治学の解説に対して、それを「行うこと」の詩学と政治学を実践的にとらえようとする。ここで紹介される手法はインタビュー、参与観察、ある集団への集中的な参与観察調査(フォーカス・グループ)、写真撮影やビデオ撮影をととしての調査である。
- 76) Crang, M., 'Telling materials' (前掲4) pp. 127-144. ここでクラングがエスノグラフィックな調査実践の例として注目するのが、都市を遊歩しながら都市空間がスペクタクル化される様子をファンタスマゴリ的にとらえながら断章として示したヴァルター・ベンヤミンと、都市の下からのまなごしや空間的实践を説いたミシェル・ド・セルトーである。
- 77) クラングは次のように言う。「(遺跡)はアイデンティティを示す物ではありえなく、それが「物としての遺跡」によって構成される布置である」。前掲72) (2) p. 353.
- 78) こうした用語について容易に読んで理解できるものとして、(1)ラトゥール(川崎 勝・平川秀幸訳)『科学論の実在—パンドラの希望』産業図書, 2007, の用語解説がある。またアクターネットワーク理論の全般的な論集として次のものを挙げておく。(2) Law, J. and Hassard, J., ed. *Actor network theory and after*, Blackwell, 1999.
- 79) サイエンス・ウォーズに関しては、1998年の『現代思想』26巻13号で特集「サイエンス・ウォーズ」が組まれており、そこに収められた論考を含む(1)金森 修『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版, 2000, がある。またこの論争において重要な位置を占めるものとして、(2)ソーカル・ブリクモン(田崎晴明・大野克嗣・堀 茂樹訳)『「知」の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用—』岩波書店, 2000. 前掲78) (1)はこのサイエンス・ウォーズに回答する形で書かれたものである。
- 80) Latour, B. *We have never been modern*. Harvard University Press, 1993.
- 81) しかし、スリフトも前掲66)で批判するように、このアクターネットワーク理論が広まる中でそうした政治的な企ては捨象され事物と人間との関わりだけが便利な分析概念として安易に用いられている。アクターネットワーク理論を用いる日本の研究にも、同じような批判が応用できるかもしれない。
- 82) (1) Callon, M., ed. *The law of the markets*, Blackwell, 1998. (2) Callon, M., 'Why virtualism paves the way to political impotence: a reply to Daniel Miller's critique of the laws of the markets', *Economic Sociology - the European Electronic Newsletter*, 2005, pp. 3-20. (3) Miller, D., 'Turning Callon the right way up', *Economy and Society*, 31, 2002, pp. 218-233.
- 83) ここでの「翻訳」とは同じでも平等でもない二つの事物を作りあげていく一定ではない作業のプロセスを意味する。Law, J., 'After ANT: complexity, naming and topology' (前掲78) (2)), p. 8.
- 84) 「物質」という概念は二度標記されねばなりません(その他の概念も同様です)。すなわち一方では脱構築される領野において。これは転倒の局面です。それから他方では脱構築するテキストにおいて、そしてこの概念がこれまでとらえこまれていた諸対立(物質/精神, 物質/観念性, 質料/形象, 等々)の外で」。デリダ(高橋充昭訳)『ポジション』青土社, 1981, 97頁。
- 85) デリダ(足立和浩訳)『根源の彼方に—グラマトロジーについて 上・下』思潮社, 1972. 超越論的反省や現象学的還元もまたこの罫に陥っていることはよく知られているとおりである。
- 86) Kearnes, M., 'Geographies that matter — the rhetorical deployment of physicality?', *Social & Cultural Geography*, 4, 2003, pp. 139-152.
- 87) 英語圏地理学における存在論やマテリアリティの議論は、廣松渉による物象化の議論を想起させる。とりわけ、廣松が「もの」に対する「こと」の基底性、すなわち関係性の一次性を説くとき、その議論はほとんど重なる。では現今の空間的存在論やマテリアリティの議論と廣松の議論はどこが異なるのか。おそらくそれは、後者があくまでも物象化された世界の省察(廣松の言葉を使えば「学知」)のための手続きを強調するのに対して、前者は事象生成の契機にまで議論を広げていることであろう。
- 88) アンダーソン・トーリアア=ケリー(森 正人訳)「社会・文化地理学における物質/問題」空間・社会・地理思想, 11, 2007, 83-89頁。
- 89) Whatmore, S., 'Materialist returns: practicing cultural geography in and for a more-than-human world', *Cultural Geographies*, 13, 2006, pp. 600-609. ワットモアはこの論文において、近年のポストゲノムのバイオテクノロジーの勃興にともなう身体の再物質化や食物や健康に関する社会的不安の増大によって地理学的研究にも四つの点で転回が生じているとする。それは(1)言説から実践への注目(2)意味への負荷から情動への負荷への移行(3)社会-物質的世界を構成する人間と非人間の関係、つまり人間以上の世界の理解(4)アイデンティティの政治学から知識の政治学へのシフトである。
- 90) 前掲2) および、アルチュセール(福井和美訳)『マキャヴェリの孤独』藤原書店, 201.
- 91) 場所や空間的存在論的理解が日本の地理学で皆無だったわけではない。たとえば松本博之の一連の研究は現象学的還元することなく身体と場所との関わりをとらえようとしている。また大城直樹は、場所の実体論的理解からも安易な社会構築主義的理解からも離れ、場所的なるものがその都度作り直されるものであること、にもかかわらずモダニティにおいてはそれに根付いている感覚が所与のものとして立ち現れてきてしまうことを論じている。中島弘二はアルチュセールの偶然的唯物論を「地理的唯物論」と読み替え、マシー、レヴィナス、プーランツァス、アルチュセールなどに触れながら、空間のマルクス主義地理学的解釈を回避し、空間性や物質性や主体と客体の区分の不可能性を論じる。福田珠己は現代における地域文化なるものが行為遂行的に生産されていることを指摘している。これに加えて泉谷洋平によるギデンズの再帰性をめぐる

- 議論, 山口覚の人間ネットワークの複雑性の議論も挙げられる。こうした成果こそ (そうしたければ) 日本の地理学の挑戦とすべきであろう。(1)泉谷洋平「行為の自己言及性と時空—人文地理学者のアンソニー・ギデンズ理解をめぐる—」空間・社会・地理思想7, 2002, 2-18頁。(2)大城直樹「墓地と場所感覚」地理学評論67, 1994, 169-182頁。(3)中島弘二「空間の存在論—「語りえぬもの」の地理学—」大分大学教育学部研究紀要15-2, 1993, 249-262頁。(4)中島弘二「政治地理学と唯物論—政治理論と空間理論の接合に向けて—」空間・社会・地理思想1, 1996, 12-25頁。(5) Fukuda, T., 'Theorizing local culture: cultural turns in contemporary Japanese society and current studies on local culture', *Jimbun Chiri*, 57, 2005, pp. 571-584.(6)松本博之「都市的なるものの驍—身体性からの逆照射—」(関根康正編『都市的なるものの現在—文化人類学的考察』東京大学出版会, 2003) 394-420頁。(7)山口 覚『出郷者たちの都市空間』ミネルヴァ書房, 2008。なお, 本稿に関するものとして「ホーム」という地理的事象が関係主義的に立ち現れる研究をレビューする(8)福田珠己「『ホーム』の地理学をめぐる最近の展開とその可能性」人文地理60-5, 2008 (印刷中) を挙げておく。
- 92) ダイアグラムとは知権力を持続的に分配配置する一つの(非)場である。これを明快に論じているのがドゥルーズ (宇野邦一訳)『フーコー』河出書房, 1999, である。
- 93) 前掲78) (2)
- 94) たとえば地理学では, *Environment and Planning D: Society and Space* 36巻8号が, ノエル・カストリー (Noel Castree) とキャサリン・ナッシュ (Catherine Nash) を編者とし, 先述のワットモアやブルース・ブラウン (Bruce Braun) らを加えて特集「ポスト・ヒューマニズムを位置づける (Mapping posthumanism)」を組んでいる。
- 95) たとえば前掲70) (2)。
- 96) たとえば前掲70) (1)。
- 97) 2008年より出版社 Elsevier より雑誌 *Emotion, Space and Society* が発刊された。編集担当の一人は地理学におけるジェンダー研究を率いてきたリズ・ボンディ (Liz Bondi) である。
- 98) 2001年の *Transaction of the Institute of British Geographers* 誌において感情の地理学が特集されており, 編者のケイ・アンダーソン (Kay Anderson) とスーザン・スミス (Susan Smith) は, 社会的諸関係は感情をとおして生きられるのであり, そうした感情をとおして関係性がいかに社会と空間を形作るかが重要だとする。このとき, モダニティのモラルを批判する地理的想像力だけでなく倫理や感情も視野に入れる地理的感性が求められるのである。Anderson, K. and Smith, S., 'Editorial: emotional geographies', *Transaction of the Institute of British Geographers*, NS, 26, 2001, pp. 7-10.

Tracing the Discussions towards the Traces of Matters and the More-Than-Human World in Anglophone Human Geography

MORI Masato

Mie University

This article traces some trajectories of social and cultural geography since the end of the 1980s to the early 2000s and attempts to explain how the geography of materiality has become a matter in current Anglophone geography, especially in the United Kingdom. Although the new cultural geography of Japan redefines social and cultural geography and focuses on discursive practices and representations, in Japan there is low awareness of discussions on post-humanism, which is a topic in Anglophone geography. Anglophone geography consists of topics such as materiality, performativity, complexity theory, and actor-network theory. There is no paper in the Japanese or English literature in Japan that discusses such topics. Hence, this article attempts to establish a framework to facilitate the discussion of topics such as those mentioned above.

To begin with, the process of development of the new cultural geography is detailed in order to review the questions raised towards the end of the 1980s on both sides of the Atlantic. The new social and cultural geography has progressed beyond the conventional understanding of culture, which is sustained by traditional cultural geography, stressing the complex relation between culture, economy and politics, and has also served to underline the crisis in geographical representations associated with anthropological discussions. In this consideration, moral geography,

which forms webs of ideologies through space, place, and landscape, is examined. There have been criticisms of the new cultural geography, of which a problem of reification of the idea of culture is noted here. However, the controversy around this criticism seemingly still retains a problem of metaphysics, and rigidly assumes the existence of 'subject' and 'object'. Phil Crang's paper that intends to combine the cultural aspect with economic geography implies the idea of culture and economy as something performed. It states that there is no linearity or predetermined harmony among cultural, economic and political practices. This point of view was amplified in some lines of discussions in the late 1990s.

Second, theoretical frameworks for performativity, hybridity, ethics, non-representational theory, complexity theory, and actor-network theory are outlined in this essay. The power of things, women, nature, etc. that have been objectified is included as these discussions revolve around the issue of western metaphysics which continually attempts to establish a rigid division between the subject and the object. The distinction has been always/already mediated by the corporeal. The traces left by the corporeal or things reveals the impossibility of the execution of the project of western metaphysics. Ethics are centered, instead of moral geography, to grasp the entanglement of humans and non-humans.

Third, criticism of the material turn that occurred at the end of the 1990s is studied. The discussion on materiality became a critical vehicle to overcome the weakness of verbal analysis. Mike Crang's papers on heritage show that materiality emerges in various practices and affects people's memories. Materiality is not only an issue of matter. Subsequently, there is reference to a controversy between Daniel Miller, who influenced the material turn in geography, and Michel Callon, who proposed the actor-network theory. It demonstrates how Miller is captured by the classic Hegelian/Marxist concept: Miller assumes the linearity of ideology in a market and the predominance of the subject over the object. It is, therefore, understandable that some geographers were accused of continuing to retain Hegelian beliefs, i. e., the belief that there is a binary relation between subject/object, spirit/thing, and human/nature.

Finally, the concept of post-humanism that summarizes the bundle of discussions mentioned before, and an ontological understanding of existence (e. g., in geography, space, place, landscape, etc.) are explained. An understanding these topics leads to a grasp of current topics such as affect, complexity, a 'more-than-human world', liquidity, and care.

Key words : cultural turn, metaphysics, ontological turn, materiality, post-humanism, ethics